



社会科学研究部報

令和6年9月30日
浜松市教育研究会 社会科学研究部

令和6年度 第2回小学校社会科学研究部 研修会

8月1日（木）の第2回小学校社会科学研究部研修会では、午前引佐地区にて臨地研修、午後みをつくし文化センターにて実践発表と講演会を行いました。

1 臨地研修

<気賀関所>

奥浜名湖観光ガイドの方々を講師として、気賀関所について解説をしていただいた。気賀関所は慶長6年（1601年）に徳川家康によって創設されたと言われている。現在の気賀関所は、ふるさと創生事業の一環として、平成2年（1990年）に再建された。冠木門や本場所、東見番所など、当時の通行人の荷物や身分を調べるという目的を果たす施設が再現されていた。また、関所には珍しく牢屋も設けられていた。姫様館には、当時使用された手形や駕籠など、宿場に関する貴重な資料も多く展示されていた。当時の風情が感じられるだけでなく、様々な施設や資料を通して江戸時代について学ぶことができる場所である。自身の教材研究に生かせるだけでなく、校外学習においても、江戸時代の様子を児童が体感できる施設である。



（文責：光明小学校 木下 尋之）

<みをつくし文化センター>

浜松市博物館、館長 鈴木一有氏を講師として、銅鐸と天白磐座遺跡について解説をしていただいた。細江町は、弥生時代後期の銅鐸が複数出土した全国的に貴重な場所であることや、銅鐸が社会統合のシンボルの一つとされており、時代とともに大きさや形が変化していったことなどを教えていただいた。また、天白磐座遺跡は、大雨や洪水など、荒ぶるものを鎮めるためのまつりが行われており、雰囲気やまつりの方法が世界遺産である「沖ノ島」と同じようなものであったということなどを学んだ。銅鐸が出土した滝峯才四郎谷遺跡や古墳時代の遺跡にあたる天白磐座遺跡などは、地域の身近で貴重な資料として、社会科の学習に取り入れることができる題材だろう。



（文責：可美小学校 蘭田 柀人）

<地域遺産センター>

浜松市文化財課井口氏を講師として、井伊氏や井伊谷の歴史について解説をしていただいた。井伊家では、桶狭間の戦い後、後継ぎとなる男子がいなくなり、受難の時代を迎えたが、直虎の活躍や直政の誕生により、井伊家再興が果たされた。井伊家が苦難を乗り越えるまでの直虎の攻防について、資料とともに詳しく教えていただいた。また、井伊谷を中心に発掘された土器や発掘調査についても教えていただいた。子供達が社会的事象をより身近に感じられる手立ての一つとして、地域の遺跡や歴史を積極的に活用していくことが重要である。（文責：竜禅寺小学校 大場 愛菜美）



2 実践発表

『「つながる」「つなげる」社会科授業』

初生小学校 教諭 大木 健太郎

初生小学校の大木教諭より、昨年度の実践が発表された。本実践では、意欲的に社会的事象を追究するために、学習者が社会的事象を自分事として「つながる」こと、また未来を問いつけるために知識を「つなげる」ことを目指し、主題を『「つながる」「つなげる」社会科授業』とした。小学校5年生の「わたしたちの生活と工業生産」の「自動車をつくる工業」での実践であり、以下の3つの視点から整理されている。



①連続性のある「つながる」単元構想

知識をつなげながら理解を深めていくために、連続性のある単元を構想する必要があると考えた。連続性のある単元を構想するための手立ての一つに、学習の導入で単元を通した学習問題を設定することが挙げられる。本単元では、自動車メーカーの見積もりシミュレーターを活用し、児童同士で自分が作成した自動車を見比べる活動を行った。一つの車種でありながら、様々な外観の自動車が出来上がることで「どのようにして好みに合わせた製品をつくられているのか」という課題を共有し、「自動車生産に関わる人々は、様々な種類の製品をつくるために、どのような工夫や努力をしているのだろうか」という学習問題を設定することができた。

②知識を「つなげる」まとめ

知識を深めるためには、自身の学習の成果を振り返る「まとめ」を工夫する必要があると考えた。本単元では、児童がまとめを具体的に書くことができるように、調べて分かったことと、それが何のためのどのような工夫や努力なのかを必ずつなげて書くように指導した。また、数ある情報の中から、自分が特に感心した例を取り上げて書くように指導した。このようなまとめの書き方の指導を繰り返したことで、具体的なまとめを書くことができる児童が増えたと感じている。

③社会との「つながり」を実感する手立て

学習者自身が学習対象を自分事として捉えることができれば、より効果的な学習につながると考えた。本単元では、児童と自動車をより近づけるために、実際の自動車のカタログを資料として用いたことで、自動車のそれぞれの機能の開発には、消費者のどのような願いが取り入れられているのかを具体的に考えることにつながった。児童の実態に合った実物や資料を活用することで、児童の主体的な学びを育むと感じた。

3 講評

富塚西小学校 校長 稲田 晴彦

実践発表を聞き、素晴らしい点が多くあった。まず、単元の授業を構想するにあたり、児童の思いや実態を大切にしたところである。事前アンケートや自動車づくりについての図を描かせることで実態を把握していた。後部座席に乗ることが多い児童の実態から、教材を考えられていた。大木先生のテーマでもある「つながる」「つなげる」授業を実現するため、本時のまとめや単元のまとめも工夫されていた。特に単元のまとめでは、導入時に描いた、自動車づくりの図をもう一度描くことで、児童が成長を実感できたと思う。これからも児童と社会的事象がつながるような実践を期待している。



(文責：尾奈小学校 上島 亮介)

4 講話

「子どもが意欲的に追究する社会科授業づくり」

大阪青山大学 服部 太氏

①意欲的に追究する姿とは

意欲的に追究する姿とは、活動や思考時に「他者」に働きかけている姿であると考えられる。他者とは友達や先生なども含まれるが、モノ（教材や教具）との関わりもここでは挙げられる。他者に働きかけを促す際、教師はつい、「話し合ってみよう」と児童に投げがちである。児童からすれば、何を話し合うべきなのかが、明確に示されていないため、対話ではなく、会話や雑談になりがちである。子どもに丸投げすることは、意欲的に追究することにはつなげていかない。



②子どもが意欲的に追究する社会科授業づくり

子どもが意欲的に追究する社会科授業づくりについて大切なことは、学習内容と学習問題の教材研究である。前述した、他者に働きかけている姿を実現するためには、学習内容で思考の範囲を策定し、学習問題で思考の方向性を提示することが必要となる。学習問題が児童にとって、「簡単に分からない」「答えが一つではない」「考えが更新される」からこそ、誰かと協働していききたいという意欲をもつことにつながっていく。

③学習内容について

学習指導要領では、各学年で教えるべき内容や身に付けたい資質・能力が示されている。教科書も指導要領に準拠して作成されている。このことを踏まえると、教師ができることとしては、教材研究の段階で、資料を選んだり、手を加えたりすることである。教科書で教えるためには、教科書を批判的に読む必要がある。教科書の記述から「おかしい」や「本当か」と思う点が、児童にとっても疑問を生むポイントである。教材研究の中で矛盾や「昔は〇〇だったが、今は□□である」などといった意外性を見付けられると良いのではないだろうか。

④まとめ

考えることが面白いと児童が思うことは、意欲的に追究する姿につながる。そのために、教材研究における良質な学習問題や学習内容の準備が必要である。急に意欲的に追究する授業ができるわけではない。一年に一つでもよいので、力を入れて単元づくりを行っていただきたい。教材研究のされた授業の積み重ねが、意欲的に追究する社会科授業の実現につながっていくと考える。

（文責：光明小学校 木下 尋之）